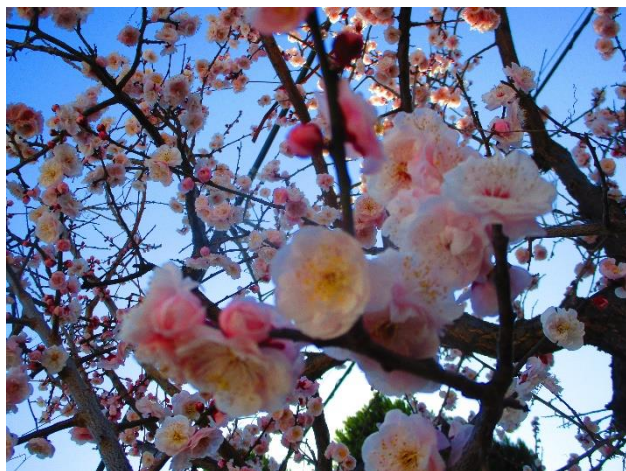


# 園のおたより



第 11 号

令和 6 年 2 月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

## おおきなかぶ

園長 関 由紀子

ある日、1くみさんに不思議な大きなダンボール製のお鍋が置いてありました。中を開けてみるとおおきなかぶがあり、『1くみさんの題目は“おおきなかぶ”だ』とピーンとききました。“おおきなかぶ”はそれに関する専門的な研究があるほど日本人にとっては大切な物語だそうで、教科書にも採用されています。原作はロシアの昔話なんですね。実は私の娘も今までに2回、“おおきなかぶ”を演じました。1回目は2歳児のときにネコ役、2回目は小学1年生の時に孫役でした。娘に演じたときのことを聞いてみると、「覚えていない」と素っ気ない返事。親にとっては忘れられない貴重な思い出なんですがね。

1くみさんのかぶを引っばる練習(?)を見ながら、かわいいなあとほくそ笑んでいると、約半世紀前の記憶が沸々とよみがえってきました。それは“わたしも幼稚園の時にあのおおきなかぶをひっぱったんだ”という記憶です。娘が演じたときには思い出さなかったのに、なぜ今回思い出したのか。それは、1くみさんの『おおきなかぶ』が、私はあのかぶを家に持って帰ったことを想起させたからでした。私が演じた役についてはさっぱり思い出せないのですが、じゃんけんに勝っておおきなかぶを貰えることになり、園バスの後部座席にかぶを抱えて座り意気揚々と帰ったこと、かぶを見て母親が困ったような顔をしたこと(当時狭い団地に4人で住んでいました)を思い出しました。先日家族に当時のことを聞いてみると、私の母は「覚えていない」、私の妹は「あのかぶ、ずいぶん長い間部屋の隅においてあったよ」と返事がありました。

1くみさんのみんなは、私に“おおきなかぶ”を演じることがどんなに楽しいか教えてくれていました。どんな動物が出てくるのか、自分の役がどんなに素敵か(カワウソが絶滅危惧種であることを教えてくれたお子さんもいました)、“森のスープ屋さん”ではみんなで踊ること、パパママが見に来てくれることを楽しみにしている、など書き切れません。今年の「ともだち会」は子どもも大人もみんなが楽しいことを目標としていましたので、1くみさんの様子はとてもうれしく思いました。あのおおきなかぶをみんなでひっぱったことを、1くみさんはどんな思い出にするのでしょうか。それぞれに素敵な思い出になることを願いたいと思います。

## 小学校6年生の授業から

先日、附属小学校6年生のクラスで行われた「親となることについて学ぶ」授業を、幼稚園の教員も参観する機会がありました。授業を担当されたのは、埼玉医科大学の是松先生です。小児科医の立場から、こどもたちに関心をもってほしいというテーマが設定されていました。授業は、次のようなとても具体的な事例の解決策を考えてみようというものです。

『27歳太郎さん、25歳花子さん。会社の同僚で結婚、マンションを購入。ともに両親は健在で仕事をしています。太郎さんの両親は近くに住み、花子さんの両親は電車で2時間ほどの所に住んでいます。結婚1年で妊娠、花子さんは産休・育休を取り、太郎さんは仕事を継続。出産予定日より1日早く生まれ、誕生1週間後に産婦人科クリニックを母子で退院、3人での生活が始まりました。授乳間隔は3時間ごと、それが毎日続き、花子さんは寝不足で疲れてきました。…この課題をどう解決しますか？』

まず一人一人解決策を考えた後、数人のグループでディスカッションとなりました。その後、クラス全員に戻って発表し合い、みんなで共有し、最後にまた、一人一人自分の考えをまとめ直すという45分間でした。

「夜間はミルクにして父があげる…昼間仕事があるけれど大丈夫？」「祖父母に頼む…仕事をしているから頼めるか？」「ベビーシッターに頼む…お金はかかる？」「父が在宅勤務をする…仕事の内容にもよる？」「父が育休を取る…取れる職場かな？」「好きな音楽を聴いたりしてリラックスする」

「よく眠れる枕に変える」、様々なこどもたちのアイデアが出され、それに対して、必要となるお金の問題、働く職場の雰囲気などに関する現状について先生の助言も交えながら、授業が進みました。授業のまとめとして、将来、自分がこどもをもつかどうかは分からないけれど、こどもの周りにいる大人みんなが、少しずつ力を出し合うことが解決の糸口になるかも知れないという話がありました。

この授業は来年度以降、附属中学校でも発展的に行う計画とのことです。クラスの中には、本園を卒園した人もたくさんおり、6年前に3組にいた頃の姿を思い返しながら、この間の育ちを実感することができ、嬉しいひとときでもありました。幼稚園は、幼児期のほんの数年、共に生活できる場ですが、卒園すると、直接的に私たちがこどもたちに関わることはなくなります。これから進級、卒園の時期となりますが、一人一人のこどもたちのその後も続いていく生活を、こどもたちの周りにいる大人の一人として、長く応援していきたいと思います。

(副園長)



## 1くみ

### 「イメージの中で自分らしく」

1組の遊びは、毎日いろいろなイメージから生まれていきます。遊びと自分のイメージとは切っても切り離せない関係にあります。また、自分のイメージで遊んでいたところに友達の影響が加わったり、新しい物を手にしたりすることで、一つのイメージが大きく広がっていきことがあります。先日のももち会のようなみんなでの一つのイメージの中で作り上げていく遊びもそうですが、日々の遊びにこそ顕著に見られます。最近では砂場での遊びによりじっくりと、友達とも関わりながら進めていく姿があります。ケーキ屋さんになって遊ぶ人は、砂と水を混ぜ、スポンジの生地を扱うようにじっくりかき混ぜます。大人が「何ケーキ？」などと問いかけたり話したりしていると、「ご注文は何にしましょうか？」と別の方がウェイターになって加わりました。言葉遣いから、振る舞いまで本物のウェイターさんのようです。遊びの中で子どもたちの言動はちょっぴり背伸びをしたようなものになることがあります。その背伸びが子どもたちを大きくしているのかなと感じることがあります。

鬼遊びでは、警察のイメージで動く人もいれば、オバケやサメから逃げるイメージで動く人もいます。何人かが集まって遊ぶ中で自分のイメージ通りに動くことができない場合もあります。そんなある日、「やっぱりやめた」と思い通りにいかなかったので遊びを離れた人がいました。しばらくブランコに乗って遠くから様子を見ていましたが、「やっぱりやる」ともう一度遊びに加わりました。終わったあとには「〇〇ちゃんの鬼ごっこも面白かった」と話す姿もありました。このように友達の影響も自分のものとして取り込みながら子どもたちは世界を広げていきます。

イメージを通して子どもたちは様々なことを経験します。その経験の中で子どもたちはさらに大きくなっていくのですが、イメージの世界は大きくなっていく過程の中で、段々と生活の中から切り離されていってしまいがちです。3歳、4歳の今の時期だからこそイメージの中での遊びを大切にしていきたいと感じます。3学期になって「もうすぐ2組さん」と話す人もちらほらと見られます。心身ともに一回り大きく、ぐんと伸びていくこの時期の育ちを支えていきたいと思っています。





## 2くみ

### 「友達の言葉」

先日のももち会ではあたたかい拍手をありがとうございました。お客さんに見てもらおうことを楽しみにしていた分、緊張する気持ちの中にも見てもらえた嬉しさや楽しさを感じることができたようでした。

大きな行事を終え、2組では新しいグループを作り、みんなでグループの名前を決めてみることにしました。グループごとに頭文字となる平仮名を一文字伝え、その文字から始まる「食べ物」の名前を考えました。あるグループではそれぞれが思いついた食べ物を一つずつ出し合い、それを合体させて「あずきあいすくりいむ」というグループの名前に決めたり、「さんまにしよう」とアイデアを出してくれる人がいると「それにしよう」と友達のアイデアを受け入れてすぐにグループの名前が決まったり、グループごとに自分たちが納得できるよう考えながら名前を考えていき、7つの新しいグループができました。自分たちで考えながら名前を考えたことで、グループやメンバーの友達により愛着を感じているようです。

そしてもう一つ、食事前に机を拭くことと食事の挨拶をすることも「当番のお仕事」としてグループごとにやってみることにしました。グループの中に気付いていない人がいたら声を掛けて気付けるようにしたり、机の拭き方が分からない友達がいたら「こうやって（布巾を）半分に折って、端っこ端っこで拭くんだよ」とやり方を教え合ったり、自然と“グループのみんなで”取り組もうとする姿があり、一人一人の優しさや大きな成長を感じています。

降園時には遊びの中で見つけたこと、クラスのみんなに伝えたいことを伝える「お知らせの時間」をもつことがあります。友達の話聞いて、「それはどこで見つけたの」と疑問を口にして次の日に自分でも探してみたり、遊びのお知らせを聞いて「行ってみたい」とその遊びに興味をもったりするなど、友達の言葉から自分の世界が広がっているようです。お知らせをした人は「友達に自分の言葉を受け止めてもらえる嬉しさ」、聞いている人はその姿を見て「自分もやってみたいという新しい興味」をもらい合う時間になっているのではないかと思います。

2組での生活も残り3週間程となりました。生活や遊びの一つ一つがそれぞれの自信となるよう引き続き支えていきたいと思っています。





### 3くみ

#### 「心に残る」

ともだち会は「楽しい会にしたい」「みんなと創ることを大切にしたい」「うわあ、やったあ！という嬉しい気持ちで（達成感を得て）小学校に行きたい」とみんなで決めてから、毎日みんなで大切に、自分もクラスの大切な一人だという気持ち進めていました。当日は、おうちの方々があたたかく見守ってくださる中、子どもたちはドキドキを楽しい！に変えながら、言葉にしたり、動きにしたり、友達と息を合わせたりしていました。

さて、とある日に大学へ出かけ、竹澤先生（バッハのはかせ）から教えていただいたお話がありました。約200年～300年前に楽譜ができ、そこから楽譜通りに弾くことが求められるようになりました。楽譜に書かれていると自由にできない苦しさも生まれたそうです。ヴェーバーやショパンといった名だたる音楽家は、即興の演奏家であり、当時貴族たちは、演奏家の奏でる即興を楽しむことが喜びと、ステータスであったそうです。昨日と今日では違った味わいがあり、その場にいた人にしか味わうことのできない感動があったのです。竹澤先生は続けて、「音楽は、花火と同じ」消えるものだけれど、心に残ると教えてくださいました。ともだち会も、まさに、その場にいたからこそ、忘れられない感動を味わえたのではないのでしょうか。そして、心に深く残る大切なものになったのではないかと思います。もちろん子どもたちにとっても、味わい深い心に残る一日であったと思います。それからの子どもたちは、さらに生き生きと暮らしています。友達と笑い合う姿、思いを合わせて遊ぶ姿、アイデアを出し合う姿がキラキラとして眩しいです。みんなでやり遂げたことが自信となったのだと思います。

4月からの毎日を思うと、誰か1人でも3組にいなかったとしたら、今の景色は見られなかったのだらうと思います。いろいろな感性や好みをもった美しい人たちが響き合って、素敵な3組があるのだとしみじみ思います。

さて、来月もやりたいことがたくさんあるようです。醤油工場に遠足をし、最高のお醤油を持って帰る、収穫した大豆で豆腐作りをして醤油で食べる、栽培しているお野菜で胡麻和えやお味噌汁を作る、たくさん取れた藍の種のプロジェクト…1日1日を大切に、みんなで思い切り楽しく暮らしたいと思います。

